

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 31 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370598

研究課題名(和文)より高度な音声能力の養成を目指した日本語音声教育に関する研究

研究課題名(英文)The Study on Japanese Pronunciation Teaching for Superior-level Speakers

研究代表者

河野 俊之(Kawano, Toshiyuki)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：60269769

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語母語話者に引けを取らない日本語能力を身に付けたいと考える学習者も相当いる。その際に最も問題になるもの1つが発音で、特に、アクセントは、1つ1つ覚えるしかなく、最も難しいと考えられている。そこで、本研究では、品詞、語種、語構成、拍数、アクセント型のルール、アクセント型について分析を行い、わずかな例外はあるものの、1つのアクセント型しかないもの、2つのアクセント型しかないものを明らかにした。これは、従来指摘されている、イ形容詞や動詞と同様である。そこで、アクセント型を推測し、推測の正誤がフィードバックされることで、教室外でもアクセント型について学習するためのEラーニング教材を作成した。

研究成果の概要(英文)：It is often said that for learners of Japanese to acquire Japanese accent of simple words, they can only memorize each word individually. However, it is unlikely that Japanese native speakers follow the same process. Thus this study clarified a tendency in the accent pattern and its rules. Based on the results, a practice was conducted in which the teacher taught the tendency and the rules. It was observed that consciousness can be raised through comparing the difference between his own accent and that of the native speaker's. Based on the results of the practice, we developed e-learning system in which learners study these accentuation rules explicitly and guess those of each word.

研究分野：日本語教育

キーワード：音声教育 アクセント 気づき イントネーション プロソディーグラフ Eラーニング 超級 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

(1)日本語母語話者に引けを取らない日本語能力が必要な状況にあり、また、そのような日本語能力を身に付けたいと考える日本語学習者は相当いる。その際に最も問題となるものの1つが発音である。しかし、より高度な日本語の発音能力を望んだとしても、現在の日本語教育は必ずしもそれに応えていないと考えられる。

日本語母語話者と間違われるような発音を身につけたいと考える日本語学習者がいる。その際に最後まで問題として残るのがアクセントである。動詞やイ形容詞と異なり、単純名詞については、「テレビ」「たまご」「やすみ」「さかな」のようにn拍語には、n+1のアクセント型がありうるため、1つひとつ暗記しなければならないとされている。そのため、従来のアクセント教育では、以下の方法がよく行われている。

(ア)1つひとつの語について、教師やCDのモデル音声を繰り返す。

(イ)「テレビ」「たまご」「やすみ」「さかな」等、アクセントの下がり目を付したものをそのアクセント型で言う。

(ウ)教師やCDの音声を聞いて、「テレビ」「たまご」「やすみ」「さかな」のどれと同じかを答える。

(エ)教師やCDの音声を聞いて、アクセントの下がり目の有無やその位置を答える。

このような方法を否定するわけではないが、このような方法が苦手な学習者も多く、より効果的な方法を開発する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

(1)超級・上級の日本語学習者がより高度な日本語の発音能力を望んだときに、それに応えられるような教育及びその基礎研究を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)超級日本語学習者に対し、音声教育を行い、超級日本語学習者の発音の問題点などを明らかにする。

(2)旧・日本語能力試験「出題基準」に掲載された4～1級の語彙すべてについて、品詞、語種、語構成、拍数、アクセント型、アクセント型のルールについて、分析を行う。

(3)上の(2)に基づき、音声教育方法を考え、超級日本語学習者に対し、音声教育を実践する。

(4)上の(3)に基づき、Eラーニング教材を開発する。

4. 研究成果

(1)上級、超級話者に音声教育を行った。まず、学習者本人に発話資料を読ませ、次に、

そのモデル音声を聞かせ、自身が発話したと思うアクセントと比較させた。その後、フィードバックを行い、さらに、発話させた。その結果、誤ったアクセントについては、訂正されても、その後、必ずしも維持されていないことが分かった。また、シャドーイングでは、自身の発音の問題に気づきにくいことが分かった。また、初中級学習者と比べ、「有声-無声」や「ツ」等、単音レベルについてはあまり問題がなく、自己訂正がしやすいことが分かった。文末イントネーションについては、発話意図と音調の対応、特に、「よ」「ね」「か」といった終助詞の音調との対応についての教育、そして、それ以前の記述が不十分であることが分かった。そこで、Eleanor Harz Jordan & Hamako Ito Chaplin『Beginning Japanese』Yale University Press.や『みんなの日本語』スリーエーネットワークに掲載された文の文末イントネーションの音調を発話意図とともに分析を行った。

(2)名詞のうち、語数が多いものの結果を示す。

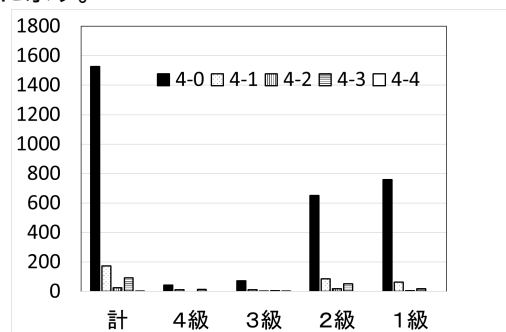


図1: + 漢語名詞のアクセント型別分類

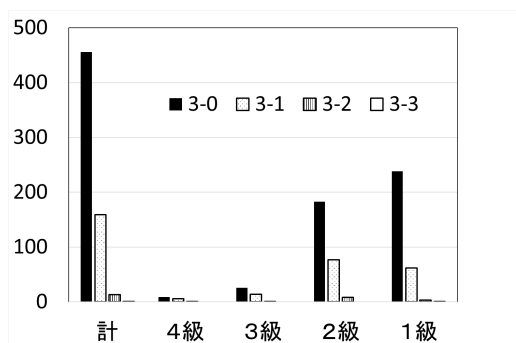


図2: + 漢語名詞のアクセント型別分類

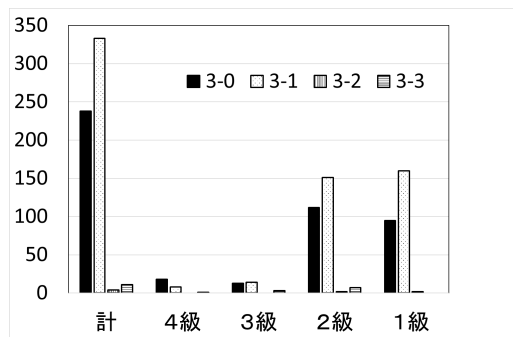


図3： + 漢語名詞のアクセント型別分類

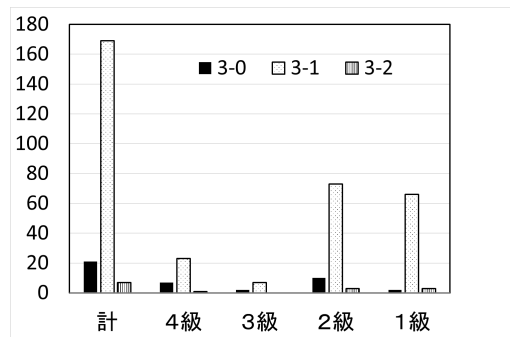


図7：3拍の外来語名詞のアクセント型別分類

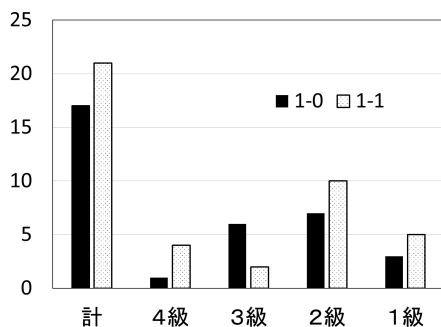


図4：1拍の和語名詞のアクセント型別分類

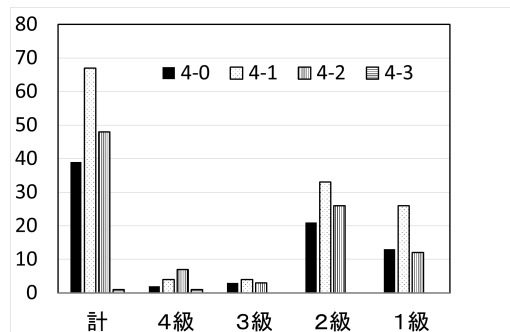


図8：4拍の外来語名詞のアクセント型別分類

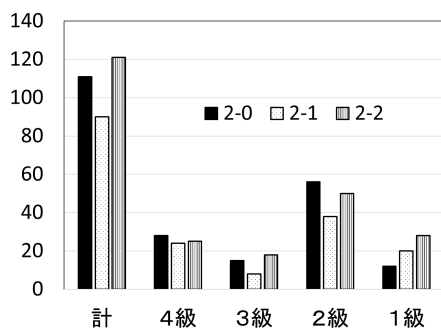


図5：2拍の和語名詞のアクセント型別分類

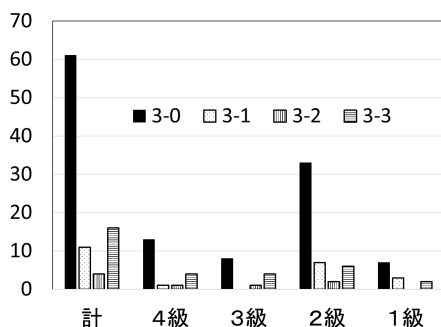


図6：3拍の和語名詞のアクセント型別分類

例えば、「宿題」等、 + の漢語のうち、84%が0型である。そのうち、4級では62%であるが、1級は90%となっており、初級に比べ、中上級では、モデル音声が表示されないことも多いことから、アクセント型が偏っていることはさらに都合がよい。基本的にアクセント型が1つであることはイ形容詞のアクセント教育と同様と言える。

また、「教師」「雑誌」等、 + の漢語のうち、0型が41%、1型が57%であり、2つのアクセント型しかない動詞と同様と言える。

(3)初級～超級話者に音声教育を行った。初級・中級学習者には、(2)の結果について説明を行い、その後、練習を行った。例えば、「宿題」等、 + の漢語のうち、84%が0型であるが、 + の漢語のモデル音声を提示し、0型かどうかを判定させた。さらに、0型でない場合は、どの型であるかを考えさせた。それにより、0～4型のどれであるかを考えるよりも正確に判定できるようになった。

(4)上の(3)の結果に基づき、moodleをプラットフォームとしたEラーニング教材を開発した。

(4)-1 動詞のアクセントのための教材

河野他.2004の動詞のアクセントを扱っている「6-1 て形『教えてください。』」「6-2 ない形『たばこを吸わないでください。』」「6-3 辞書形『チケットがあるんだけど。』」を元に、moodleをプラットフォームとしたEラーニング

グ教材に移植し、さらに、moodle の特徴を生かしたものにした。辞書形では以下の通りである。

特殊拍などの例外を除き、後ろから 2 拍目にアクセントの下がり目がある -2 型か 0 型しかないことを説明する。また、「申す」「通る」「入る」「参る」「返す」「帰る」「考える」は後ろから 2 拍目が特殊拍や母音であることから、下がり目が 1 つ前にずれることを説明する。その際、プロソディーが視覚的に分かりやすい、プロソディーグラフを提示する。

「乗る。」「聞く。」「読む。」「飲む。」「来る。」「泳ぐ。」「話す。」「食べる。」「使う。」「変える。」「忘れる。」「働く。」「集める。」の音声を聞かせ、-2 型、0 型のいずれであるかを回答させる。その後、正解を示す。

他の動詞を文字で提示し、それを録音させ、その後、-2 型、0 型のどちらであるかを提示する。モデル音声と学習者の音声を聞かせ、比べさせる。

これらは、初めて学ぶ動詞のアクセントが 2 つのアクセント型のうちのどちらであるかを考え、また、初めて聞いた動詞のアクセントがどちらであるかを習得するのに役立つ。

(4)-2 アクセント型を推測し、確認するための教材

使用する語は、現在、筆者の勤務先で最も使用しているクラスが多い初級教科書『げんき』(ジャパントイムズ)に基づく。そのうち、第 23 課の名詞を例とする。第 23 課には新出の名詞が 20 語ある。「パンクする」は既出の「する」を除くと「パンク」となるので、それらも名詞に加えた。さらに、旧日本語能力試験の「出題基準」の 1~4 級の語彙表にない語は除外した結果、以下の語が残った。

「ただ(無料の意)」「靴下」「悪口」「世話」「選挙」「我慢」「社会」「理想」「同情」「別荘」「面接」「優勝」

「ソフト」「タイヤ」「ボーナス」「パンク」「思い出」「留守番」「授業料」「小学校」

このうち、+ の漢語の「同情」「別荘」「面接」「優勝」を例とする。

「同情」や「別荘」という文字が現れる。

学習者がアクセントを推測し、発音し、録音する。

自分が発音したものが 0~4 型のどれであるかを選ぶ。

正解の音声を聞く。

正解がどれであるかが現れる。

(途中、希望があれば、適宜、学習者が録音した音声を聞く。)

誤っていた場合は、もう一度、発音する。

なお、モデル音声を聞いて、どのアクセント型であるかを判断したり、アクセント型を提示されて、正しく発音する練習、すなわち、高低の感覚を身につけるための練習については、自己モニターを活用した音声教育の E

ラーニング教材(河野.2015)を発展させたものを使用する。

(4)-3 自身の推測したアクセント型との違いに気づくための教材

教室外では、単語単独で聞くことはなく、会話文で聞くことがほとんどである。そこで、会話文を用いた。

手順は以下の通りである。『げんき』の第 23 課の「会話」を例とする。場面は、メアリーとホストファミリーが最後の夕食を取っている場面、たけしとメアリーが 2 人で空港に向かう場面、空港でたけしとメアリーが別れる場面である。

会話文が提示され、それを学習者が読んで、録音する。

もう一度、会話文が提示され、それを学習者が読んで、録音する。

会話文のモデル音声を聞く。

学習者が言うはずである音声とモデル音声との違いを考える。

学習者が言った音声の録音を聞いて、モデル音声との違いを考える。

誤りやすい音声について提示する。

の学習者が言うはずである音声や学習者が言った音声とモデル音声との違いを考える活動では、アクセントだけでなく、文末イントネーション、特に「よ」「ね」のような終助詞と文末イントネーションの教育や習得にも役立つ。例えば、「メアリーがいなくなるとさびしくなるね。」の「ね」は、モデル音声では、「上昇下降」だが、「順接・アクセント上昇」もありえる。「私たちもメアリーがいて、とても楽しかったよ。」の「よ」は、モデル音声では「低接・平坦」だが、「順接・上昇」もありえる。このように、さまざまな文末イントネーションに触れ、学習者が言うはずである音声や学習者が言った音声と比べることで、気づきが起こる。初めからモデル音声を繰り返すリピーティングやシャドーイングに比べ、より教室外での気づきにつながりやすいと考えられる。

また、リピーティングやシャドーイングでは感情等も含め、唯一絶対のモデル音声と考えやすい。教室外での自然な音声を聞いて気づくことも重要であり、そのための活動が重要であると考えられる。

<引用文献>

河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛、1日10分の発音練習、くろしお出版、2004

河野俊之、音声教育における独自の基準の観点を生かした教材、CASTEL/J in Hawaii 2015(国際大会) Proceedings、査読有、2015、107-110

http://www2.hawaii.edu/~ssatoru/other/2015castel/j/Proceedings_castel_j%202015.pdf

5. 主な発表論文等
(研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

河野俊之、超級話者へのアクセント教育
で向上しやすいものと向上しにくいもの、
日本語教育方法研究会誌、査読有、
Vol.21、No.2、2014、56-57

河野俊之、音声教育における独自の基準
の観点を生かした教材、CASTEL/J in
Hawaii 2015(国際大会) Proceedings、
査読有、2015、107-110

http://www2.hawaii.edu/~ssatoru/other/2015castelj/Proceedings_castel_j%202015.pdf

河野俊之、単純名詞のアクセント教育の
実践、日本語教育方法研究会誌、査読有、
Vol.23、No.2、2016、14-15

〔学会発表〕(計4件)

Toshiyuki Kawano、日本語の漢字語のアクセント
のルールとその習得、2014年日本語教育国際研究大会、
2014年7月12日、シドニー(オーストラリア)

河野俊之、超級話者へのアクセント教育
で向上しやすいものと向上しにくいもの、
日本語教育方法研究会、2014年9月6日、
藤女子大学(北海道札幌市)

河野俊之、音声教育における独自の基準
の観点を生かした教材、CASTEL/J in
Hawaii 2015(国際大会) 2015年8月8日、
ハワイ(アメリカ合衆国)

河野俊之、自己モニターを活用した音声
教育、日本語教育・日本語学についての
国際セミナー、2017年3月27日、バンドン
(インドネシア)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野 俊之 (KAWANO, Toshiyuki)
横浜国立大学・教育学部・教授
研究者番号： 60269769

(2) 研究協力者

西村 裕代 (NISHIMURA, Hiroyo)

〔その他の研究協力者〕

()